

迦才における別時意説の会通

江 隈 薫

迦才はその伝記をまつたく欠き、『浄土論』の著者という以外不明である。しかしこの著は完本で今に伝わり、道綽思想の繼承を明記しており、中国浄土教史において非常に重要な位置をもっている。また釈疑書ではなく概説書であり、内に「往生人相貌」章をもつなど、特異な面をもち、充分に留意して研究されなければならないといえる。

さて中国浄土教家に課せられた批難の一つに別時意説があげられる。中国仏教界で特に重視された『撰大乘論』等に依つた批判であり、諸家はその会通につとめている。しかしこれは、浄土教の基本的範疇である行願・念仏・十念等の本質について深刻な反省と検討を与え、それだけその人の教義と密接に関つているものでもある。

迦才もこの会通を行い、『浄土論』全九章のうち三章を費して論じている。したがってこの全体を考慮しなければならぬが、従来の研究は第四「出道理」章のみが取りあげられていたといえる。更にこの章中の九問答も極めて段階的・体系的

的であり、まずこの点から検討したい。

一 第四章の第一問答は次のように始つている。

夫業行紛綸凡夫莫識其緒。……捫理則方法同規就教則有不了説。今西方浄土者乃是法藏弘誓所剋法王誇以捫神世界瑩以千珍。聖主題之万相。此人及土俱非下地窺遊。經論雖説得往生。恐是別時意語。今依何道理判得往生。

教説に了と不了とがあることを前提とし、直前の「定往生因」章でのべられた諸業行が了義教に依るものであることを、どうして知りうるか、と設問しているのである。よつて、

究理者 檢諸經藏有隱顯二説 謂了義經不了義經。了義經畢竟不破。不了義經至涅槃會上並引未決破。浄土一門不入破限。当知即是了義經也。又菩薩造論解釈仏經 其不了義經即破了義之經即讚。此土一教於論中讚無有破處。

と答え、『撰論』当該文にはまつたく触れず、逆に「於論中讚」としている。このため次問でその文を直接取りあげているが、答えはわずかに「願行兼修」を説くが、すぐ「論中讚」

と『觀經教興意』の説明となり、了義教であるとのべるだけである。そしてこれを承けて第三問が設けられており、

韋提希是大菩薩為化衆生現受女身生於蓮子豈實是凡夫耶。とある。ためにもはや『撰論』文には触れず、追加問答である次の二問答にもちこされている。ところでこの答えは長文であり、『淨土論余暉鈔』の科文に沿い大略を見ると、十一段に分けられたようになる。

一、先ず難を縦許し、実業同類を引きて往生せしむるを明す。

二、權化し、実業六趣を引き、例証とす。

三、韋提凡夫身を現じ、凡夫を引くを明す。直釈と引文。

四、四十八願の本為凡夫兼為聖人なることを明す。

五、十解以上の菩薩、淨土を願生せざることを明す。

六、淨土の一門、經論中の証誠偏歎せる了義教なることを明す。

七、先匠既に願生し、臨終に瑞祥來迎を得て往生せるを明す。

八、第一問を再取し、化身土なれば地前凡夫の窺遊なるを明す。

九、下地の境界ならざれば化生入聖の能なきことを明す。

十、衆生修行の因縁と仏本願の増上縁にて往生を得るを明す。

十一、道理を決す。

一・二・三は能化は仮であつても所化は実であるとし、四・五の本為凡夫兼為聖人の主張につながり、六・七で了義教であることを再びくり返す。八ではその理由の一つとして第一問を再取し、西方淨土は三身土を兼ね、迹身化土であれば

迦才における別時意説の会通（江 隈）

地前凡夫の窺遊であると述べ九・十につながる。その文は、

若俱非下地境界者 則聖無化生之能 生無入聖之分。俱具三義 即得往生 一切衆生修行以為因縁 二弥陀本願為増上縁。二義若具即得往生。……衆生修行並得往生。

とある。かくして地前凡夫の窺遊であるから「化生入聖」がはじめて可能である、と淨土一門の優位性を語り、道綽のような二門判にはまったく触れようとしないのである。

二ではこのような主張が何故別時意説の会通となるかを検討しておかなければならない。撰論派からの批判として次のような二説が『群疑論』に記されている。

有釈者言、念仏修十六觀等即是發願（第一説）。有釈言、論師雖舉願言意亦取其念仏亦是別時之意（第二説）。

しかし『安樂集』・善導『觀經疏』・『大乘法苑義林章』・『十疑論』・竜興『觀經記』にみえる説は、『觀經』下々品文で臨終十念により往生すると説くのは別時意である、とするものである。迦才の当面した論難はこれらの内の『群疑論』第一説に類似したものと考えられる。これは淨土經にいう定散二善はともに行というに値しない、とする説であり、唐代前期においては暴論と言ひ切れない背景が想定できる。

淨影・天台・嘉祥は西方淨土は応化土であり、その往生は究極的なものではない、としており、智儼は『弥勒発問經』の十念を教理に取り入れ、よつて行に高度な価値をもたそう

としたといわれている⁽¹⁾。また西方浄土の通報化説も律宗の智首によつてなされていたと考えられる。

唯報説をとつた道緯も、凡夫はまず「相求」すべきであり「相善力微」であるが故に相土に生ずるとし、行的価値の低いことを一応認めていたといえる。また別時意説の会通では、

十念成就者 皆有過因⁽²⁾不⁽³⁾虚。若彼過去無因 善知識尚不⁽⁴⁾可⁽⁵⁾逢遇。何況十念而可⁽⁶⁾成就⁽⁷⁾。……若執⁽⁸⁾「仏意」欲⁽⁹⁾令⁽¹⁰⁾衆生多積⁽¹¹⁾善因⁽¹²⁾便乘⁽¹³⁾念往生⁽¹⁴⁾。若望⁽¹⁵⁾論主乘⁽¹⁶⁾閉⁽¹⁷⁾過去⁽¹⁸⁾因⁽¹⁹⁾。

とあり、臨終十念の善だけでは往生は不可能であるが、それが過去の善根を「増上せしめ」、相俟つて往生の善因を具足するのであり別時意ではない、としていたのである。

これに対し迦才は第五問答において「已今当の発願により往生を得」と説くのは別時意であると述べるが、ついで

若如諸浄土經⁽¹⁾ 或明⁽²⁾三福業十六觀門⁽³⁾ 或令⁽⁴⁾發⁽⁵⁾菩提心⁽⁶⁾ 七日念仏⁽⁷⁾ 或教⁽⁸⁾三發願廻向十念往生⁽⁹⁾。如⁽¹⁰⁾此等經並是往生即非⁽¹¹⁾別時⁽¹²⁾也。

と結んでいる。諸経で行とされているのをそのまま列挙し、行的価値の比較や行であることの証明をまつたくなそうとしていない。この面は教証を列挙した次章にも見出され、讃嘆や礼拝をも往生の行とし「願と兼修」するとき別時意ではない、としている。この経説への絶対的依憑を勧めるのも、浄土経はより高次な了義教という認識に依つていているといえる。

三 ししかしこの了義の意味はあまり明確にはならない。『涅槃経』

『大智度論』等で重要な語とされており、中国でも『義林章』⁽¹⁾で隠顕とも関連させて論じられている。浄土教家においても懐疑は彼の『観経疏』で詳述したというし、『西方要決』には「不了之教」という語が用いられている⁽²⁾。しかしこれらとの直接的関係が不明であり、まず『浄土論』の上で考察されなければならない。

教説の高低に触れた問答が第九章に設けられている。

問曰。如⁽¹⁾大乘經論⁽²⁾皆說⁽³⁾無相無生⁽⁴⁾。何故此經⁽⁵⁾勸令⁽⁶⁾衆生觀⁽⁷⁾於相⁽⁸⁾生求⁽⁹⁾乎⁽¹⁰⁾淨土⁽¹¹⁾。

この類の問答を道緯はくり返えし行い⁽¹⁾反論につとめていた。そして「無生の生」を知つて往生するのは上士であり、「中下の輩」は先ず相に依り往生を求むべきである、等としていたものである。しかし迦才の論理はまつたく異つてい

かかる問は不順理であると呵した上で直ちに真俗二諦を説き、西方浄土は三身を具し有相無相を備えたものであり、衆生は先ず相生觀を行じ化土中に生ずることを願うべきであるとする。また次の問答中では、

若有人言⁽¹⁾方法皆空⁽²⁾有何理事⁽³⁾者 此是大邪見人……莫⁽⁴⁾共語⁽⁵⁾也。とあり、無相のみを説く者を厳しく批判している。この点は浄土の一門においてのみ「化生入聖」が可能であるとし、衆生は「報と化とを図度」すべきでない⁽⁶⁾、ということとも考え合わすとき、有相を説く教をより高次なものとみていたと言

え、了義教の主張につながっている。

四 この会通は相貌章の記述からも知ることができる。第一の方啓法師の説話が別時意説会通のために置かれており、筋は彼の日頃の疑念が数度の夢中において解消されるというものである。しかし諸行の比較検討はまつたくなされず、ただ諸仏に「依経」「但修浄土行」等を勧められるのである。また注意を引く夢譚として次の話がのせられている。

又於別夜夢見。在二仏堂中。正当二仏前。有二僧。名曰法蔵。御二大事。就二仏堂内。迎令上レ車。戴向レ西而去也。法蔵者即阿弥陀仏也。車者四十八願也。……又於別夜夢見。釈迦如来。共二文殊師利。住二此僧前。讀二法花経。

『法華経』譬喩品に沿った夢であるが、この論中の『法華経』引用は『智度論』の孫引を除くとただ一箇所だけであり、第三章で中下の輩の五種往生因をあげた結びとして、

若能具二前五種行者。必得二往生。幸勿レ疑也。如二法華経云。我今為レ汝保二任此事。終不レ虚也。余亦如是。誓能保任終不レ虚也。

とあり、これが「法花経を讃す」る所以とみられる。意は「汝のために以上のことを責任をもつて保護し、終になつて虚しかったというのではないようにしよう」というのであり、三乗の各々に従い修行するとき、必ず大白牛車に乗せしめる、という仏の誓いである。したがって迦才は浄土經典に記された業行に勤修精進するとき四十八願に乗することができ、往

生因を完全するとし、別時意ではないとしたのである。

- 1 この章の特性は名畑応順氏も注意しておられる（『迦才浄土論の研究』一四三頁以下）。また拙稿「中国往生伝の倫理」（印仏研二〇巻一号）もこの点を考えようとした。
- 2 善導についてのこの面は池本重臣氏の研究をもつ（『親鸞教學の教理史的研究』二五〇頁以下）。

- 3 教理史的には多くの研究が既にあるが、特に基本的なものに望月信亨氏「浄土教之研究」がある（三二二頁以下）。

- 4 『続浄土宗全書』第七巻所収 七三頁上。

- 5 大正蔵四七巻 三九頁上。

- 6 大正蔵四五巻 三七一頁中。

- 7 大正蔵四七巻 七九頁下。

- 8 恵谷隆戒氏復元本（仏教大学紀要第三七号 四〇頁）。

- 9 岡亮二氏「善導の十念釈義」（真宗研究第九輯 三五頁）。

- 10 神子上恵龍氏「弥陀身土思想展開史論」。特に九三頁以下。

- 11 恵谷隆戒氏「華嚴宗二祖智儼の浄土教思想について」（井川定慶博士喜寿記念論文集 三〇三頁）。

- 12 『群疑論探要記』（浄全第六巻 一六三頁上、三三九頁下）。

- 13 大正蔵四七巻 一〇頁上。また山本仏骨氏『道綽教學の研究』

- 三一五頁以下、神子上恵龍氏『真宗教學の研究』三三三頁。

- 14 大正蔵四五巻 二四六頁中。

- 15 懷感は大正蔵四七巻 五七頁下。『要決』は同一〇九頁上。

- 16 大正蔵四七巻 六頁下、七頁上下、八頁中下、一八頁中下等。

- 17 大正蔵四七巻 八五頁上。